

## 当教会のメンバーになるために同意していただく教理

以下は、当教会のメンバーとなって、この一地方教会で、クリスチャンとしての礼拝、交わり、奉仕、献金をしていきたいと願う人に同意していただく教理（=教会の連絡ボックスを持つための条件）です。

### 1. 聖書の権威と無誤性

教会で活動を行なう時に、権威があるのは聖書の教えであり、また、その聖書は、一切の誤りを含まない神のことばである、と信じる。

### 2. 三位一体

神は、三位一体のお方である、と信じる。すなわち、父なる神、子なる神、聖霊なる神が存在としては一つであるが、父、子、聖霊として三つの位格をお持ちである、と信じる。これは、人間の頭では理解し得ないことであるが、聖書の主張であるので、そのように信じているものである。

### 3. イエス・キリストの二性

イエス・キリストが受肉された（人となられた）時から、イエス・キリストは、100パーセント完全な神であり、同時に、100パーセント完全な人であられる、と信じる。これも、人間の頭では理解し得ないことであるが、聖書の主張であるので、そのように信じているものである。

### 4. 人間は霊的に失われた者であること

人間は、罪を犯したので、そのままでは、神から受け入れられない、と信じる。どれほど品性において優れた人であっても、神に受け入れられる基準には到底及ばない、と信じる。これが、次項の身代わりと償いの必要性へとつながるものである。

### 5. イエス・キリストの身代わり、償いとしての死

イエス・キリストが十字架で死んだのは、人間の罪への罰を身代わりとして受けてくださったものであり、この身代わりの死が、罪への罰の償いとして十分なものであり、神の正義の怒りが収まり、それゆえ、信じる人は、神との和解が成立している、と信じる。

### 6. イエス・キリストの肉体のよみがえり

イエス・キリストの死が、人間の罪の赦しのために十分なものであったことを示すために、父なる神は、イエス・キリストを死者の中からよみがえらせた、と信じる。キリストが、実際の肉体を取ってよみがえられた、と信じる。

### 7. イエス・キリストへの信仰のみによる救い

イエス・キリストの死が自分の罪への罰を身代わりとなって受けたものである、と信じる時、そう信じる人は、罪の赦しを受ける、と信じる。

### 8. イエス・キリストの実際の再臨

イエス・キリストは、神がお定めになっている将来のある時に、この地上にもう一度来られる、と信じる。

## 吹田聖書福音教会が取る教理

一地方教会である吹田聖書福音教会が取っている教理は、以下の通りです。

### 1. [聖書] : 無誤性

聖書は、誤りのない神のことばである。人が書いた人のことば、人のことばであるが神のことばになり得る、救いについての教えのみ誤りが無い（他の部分には誤りがある）、などという立場を取らない。

### 2. [神] : 三位一体

神は、三位一体の神である。イエス・キリストは神である。この地上においては、父なる神の意志に全く従われたが、神であることをやめたのではない。聖霊は神である。単なる神の力の現れである、というような立場を取らない。

### 3. [神] : 神の創造と保持・人間の起源

神は、天と地、すなわち、すべてのものを創造された。人間も神によって創られた。また、神は、すべてのものを御手でおさめておられる。

### 4. [神] : イエス・キリストの処女降誕と二性

三位一体の第二格が、ある時、肉体を取り、処女からお生まれになり、100パーセント人間であり同時に100パーセント神という存在となられた。この方は、罪のないお方であった。

### 5. [神] : イエス・キリストの御業

罪の無いお方として十字架にかかり、全人類の罪への刑罰を受けた。その御業のゆえに、人に神からの罪の赦し（贖い・なだめ・和解）が与えられた。この罪の赦しは、人がイエス・キリストが自分の身代わりとなってくださったことを信じる時に、その人に適用される。

### 6. [神] : イエス・キリストの復活

父なる神がイエス・キリストを死からよみがえらせた。その目的は、イエス・キリストの死が、人間の罪の赦しのために十分なものであったことを示すためであった。イエス・キリストは、よみがえりのあと40日後に天に昇られた。今は、父なる神の右の座につき、信じる者たちのためにとりなしをしておられる。

### 7. [天使] : 存在と働き

天使は、神によって創造された。サタンも天使であるが、ある時、神に反逆した。悔い改める思いも持たない。現在は、サタンに従ってその時に墮落した天使と墮落していない天使とが存在している。聖書の中では、墮落した天使については、悪霊、汚れた霊、悪鬼などと表現されている。サタン及び悪霊は、人が神を信じないように、奇跡的なこと以外にも思想の世界への影響などを含め、ありとあらゆる妨害をし、また、信じた人に対しては、成長しないよう、同様にありとあらゆる妨害をしている。

### 8. [救い] : 人間の墮落

人は、神によって、よいものとして創造されたが、罪を犯して墮落した。これは、人ができる限りの、あらゆる種類の悪を徹底に行なっていること、人が良心を持たずよいことを一切しないことなどを意味していない。これが意味することは、墮落は人の本質と能力のあらゆる局面に影響を与え、義なる神に受け入れてもらえない存在となったことである。すなわち、人が神の怒りの対象となったということである。

## 9. [救い] : ディスペンセーション

神は時代によって異なる責任を人間に与えている。神が人間に与えた責任の違いから、地上での人間の歴史は、3つの時代（律法の時代、恵みの時代（現在）、そして、1000年王国の時代）に分けられる。

## 10. [救い] : 義認、新生、子とされる

キリストへの信仰を通してのみ、罪が赦されたという神の宣言をいただき（義認）、新しく生まれて永遠のいのちが与えられ（新生）、神の子とされる。これらはみな、神の一方的な恵みによることである。

## 11. [救い] : 聖化、栄化

信じた人は、立場としては完全で、徐々に恵みによって成長させられ、主にお会いする時には完全な者に変えられる。すなわち、信じた時に、クリスチャンとしての完全な立場が与えられる。しかし、性質としては完全ではなく、徐々に神の恵みによって成長し、性質がキリストの品性に似た者へと変えられていく。そして、この地上での死を迎える時、神の恵みによって、完全な立場にふさわしい完全な性質の者へと、一瞬に変えていただける。

## 12. [救い] : 聖化、根絶説の否定

クリスチャンは、内住してくださっている聖霊の導きによって生活するよう召されている。そうすることによって、さらに深く神にゆだねることを通して徐々に成長できるのであり、いわゆる「第二の祝福」、「第二の恵みの業」（たとえば、全き悔い改めをした時に、神が恵みとして、もう二度と罪を犯さなくなるようにと、きよめを与えてくださる、というもの）を認めない。肉の性質がこの世で根絶されることはない。

## 13. [救い] : 堅忍

一度救われた人は、決して救いから漏れない。ずっと救われている。ただし、神がクリスチャンの罪を見逃しているということではない。

## 14. [救い] : 救いについての聖霊の働き

三位一体の第三格、聖霊が、人を救いへと導くのであり、その人が信じた瞬間に、信じる人すべての内に住み（もう二度と離れない）、キリストに継ぎ合わせ、証印を押してくださる。これらのことは、信じた瞬間に起こることで、このことを聖霊のバプテスマと呼ぶ。クリスチャンになったあとは、聖霊は、そのクリスチャンを満たしてくださる。このことを聖霊に満たしと呼ぶ。

## 15. [成長] : 聖霊と奉仕

聖霊は、信じる人に賜物を与え、信じる人が奉仕の働きをすることができるようにしてくださる。クリスチャンはみな、与えられた賜物を用いて神と人に仕えるよう召されている。すべてのクリスチャンに一つ以上の賜物が与えられている。

## 16. [成長] : 聖霊の賜物

聖霊が与えてくださる賜物は、多種多様である。聖書に書かれている賜物は、18個ある：預言、奉仕、教える、勧め、分け与える、指導、慈善、知恵のことば、知識のことば、信仰、いやし、奇蹟、霊を見分ける力、異言、異言を解き明かす力、使徒、伝道、牧師—教師。網掛けしているものは、新約聖書の時代、一世紀に存在した一時的な賜物である。

17. **〔成長〕：宣教**

クリスチャンはみな、水晶のように透き通った恵みの福音のメッセージを伝えるよう召されている。

18. **〔教会〕：始まり**

教会はペンテコステの時に始まり、イスラエルとは区別される。すべての人が普遍的教会に属している。

19. **〔教会〕：活動**

地方教会において、クリスチャンは、他のクリスチャンとともに神を礼拝し、交わりを持ち、仕え合い、ささげものをして、教会の働きに加わることが求められている。

20. **〔教会〕：礼典**

教会で行なう礼典は、バプテスマ式と聖餐式のみである。

21. **〔教会〕：バプテスマ式**

バプテスマは、永遠に続く神の家族となったという事実を象徴している。バプテスマを受けることによって、自分は神の家族とともに地方教会で交わりを持ちたい、成長していきたいという願いを公に表わすのである。バプテスマを受けるための唯一の条件は、イエス・キリストが自分の救い主であると信じることである。

22. **〔教会〕：聖餐式**

聖餐式において、クリスチャンは、パンとブドウジュースという実物教材を用いて、イエス・キリストの身代わりによって自分が救われたことを定期的に確認する。パンとブドウジュースがイエス・キリストの肉と血に変化したり、パンとブドウジュースそのものに特別な効力があるという立場を取らない。キリストの身代わりを記念して行なうものである。

23. **〔終末〕：神の計画**

神はこれから起こることも、聖書の中で私たちに啓示しておられる。私たちは、将来のことも含め、すべてが神の御手にあることを信じ、安心して、現在の生活を送ることが求められている。すなわち、いつ空中再臨が起こっても大丈夫なように備えをし、それと同時に、今後も現在の生活が続くと想定し、着実な歩みをするのが大切である。

24. **〔終末〕：空中再臨（携挙）**

預言の成就として、まず起こることは、キリストの空中再臨である。この時、キリストにあって死んだ者にも、その時生きているクリスチャンにも栄光の体が与えられ、例外なくすべての者が一瞬のうちに天に上げられる（この時点で、地球上にクリスチャンは一人もいなくなる）。これを携挙という。

25. **〔終末〕：患難時代**

空中再臨に続いて起こることは、イスラエルへの預言の「第70週」（7年間の患難時代）である。これは、神の裁きの時である。多くの人々が救われるが、多くの人々が殉教する。また、多くの人々が死んでいく。この期間に、イスラエルが国家的に悔い改める。7年の終わりに、イスラエルを舞台に東西南北から軍隊が集まり、ハルマゲドンの戦いが起こる。

26. **〔終末〕：地上再臨**

キリストの地上再臨によって患難時代が終わる。この時、キリストは神としての力を表わし、逆らう者たちをみな滅ぼす。そして、千年王国が始まる。

27. **〔終末〕：千年王国**

文字通り、キリストがこの地上で王として統治する千年間である。この時は、栄光のからだを持つ人々と、患難時代をくぐり抜けた生身のからだを持つ人々などが混在する。平和なすばらしい時代となる。生身のからだを持つ人々は結婚し、子どもを作るので、多くの人々が誕生する。ところが、千年王国の終わりごろ、縛られていたサタンが解き放たれ、千年王国で生まれた人々のうち、神を信じなかった人々を惑わし、彼らとともに神への戦いを挑むが、みな天からの火で焼き尽くされる。

28. **〔終末〕：さばき**

キリストを信じて死んだ者は、直ちにキリストのもとに行き（幸せな状態）、その時（クリスチャンは携挙の時、旧約時代の聖徒と患難時代の聖徒は地上再臨の時）が来ると栄光のからだを受ける。一方、キリストを信じないで死んだ者は、千年王国の終わりの時に、白い御座でのさばきを受け、永遠の滅びに行き、永遠に苦しむことになる。

29. **〔終末〕：新天新地**

千年王国が終わると、現在の地球も消滅する。しかし、神が用意してくださった新しい天と新しい地があり、そこに、救われた者はみな、永遠に住む。そこでの都は、新しいエルサレムである。